

保育・教育の価値とリスク 感染症流行と、変わる社会のもとで

新型コロナウイルス感染症（以下、「新型コロナナ」）の流行は、この国における未就学児施設の安全、そして保育・教育の根底にある課題を露呈させたように思います。1年近く全国の先生方からご相談いただき、考えてきた立場から見えた「これからすべきこと」は…。

- ・「価値とリスクの天秤」を常に明確にする。
- ・負えない責任を負わない。
- ・保育と教育の中心は誰か、表明し続ける。

「価値とリスクの天秤」を常に明確にする

家庭でも園でも、「ケガをさせない！」を目標にしたら子どもは育ちません。全身を動かしている時に起こる、ケガにつながるかもしれない^{*1}（転ぶ、つまづく、踏みはずす等）

保育・教育の中心は誰か、 表明しておく大切さ

2

掛札逸美

KAKEFUDA Itsumi

心理学博士

保育の安全研究・教育センター

心理学博士（健康／社会心理学。専門は安全とコミュニケーションの心理学）。1964年生まれ。筑波大学卒。健康診断団体広報室に10年以上勤務後、2003年、コロラド州立大学大学院に留学、2008年、博士号取得。産業技術総合研究所特別研究員を経て、2013年、NPO 法人保育の安全研究・教育センター設立（2020年に任意団体化）。厚生労働省「平成27年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員の他、死亡事故の検証委員等も務める。

はおとなどでも不可避で、育つ過程にある子どもには不可欠。リスクではあるにしても、大きな価値に付随するリスク。価値を無視して、リスク（ケガ）を考えることはできません。

新型コロナウイルスのもと、各国は「価値とリスクの天秤」を使ってきました。最低限の社会活動以外を一時的にすべて止めた多くの国と異なり、日本は市民の自主的な「自粛」に任せました。保育施設は昨年春からずっとほぼ開所。「開所する価値」が「正体不明なウイルスのリスク」を上回ると判断したわけです^{*2}。

開所する価値は？ 集団による保育・教育を続ける価値、そして保護者の就労を守る価値です。国として「保育施設を閉めない」と決めた以上、この価値に付随するリスク（＝感染等）は社会が受け入れると決めたはず…。ところが

次々と起きたのは「保育士が感染」「園児が感染」という、園が悪者であるかのような報道でした。未就学児施設は不可避に濃厚接触の場であり、それもまた大きな価値である点が無視されてきたのです。「開所せよ。感染させるな」と。

価値を100にしてリスクはゼロにすることなど、不可能です(この文化は「リスク・ゼロ」が大好きですが)。子どもが全身を動かして活動(＝価値)をすれば、重傷にさえつながるできごと(＝リスク)は起こります。濃厚接触の場(＝価値)で飛沫・空気感染(＝リスク)をゼロにすることはできません。

では、どうすれば価値を守れるのでしょうか。まず価値を、次いで付随するリスクを、毅然と明確に伝えることです。^{*3}どのように…?

負えない責任を負わない

「保育士が感染」「園児が感染」と報道されても、保護者が園の価値とリスクを理解していれば問題は起きません。「園は濃厚接触の場であり、それが集団の保育・教育の大切な部分です。できる限りの対策はしていますが、感染リスクをゼロにすることは不可能です。ご心配でしたら利用時間を短くするなど、保護者の方が判断なさってください」と当初から言っておきましょう。^{*3}園が負う責任と保護者が負うべき責任を切り分けるのです。

「私たちの園では、こんな活動をしています。子どもは活動を通してからだを動かす練習をしている段階ですから、骨折を含め、ケガをするようなことは起きませんのでご承知おきください」と、年度初めだけでなく、ことあるごとに伝えるのも同じです。まず価値を言い、その価値に付随するリスクを明示します。

一方、子どもが園庭を走っていて転んだ時のケガすら、「おケガをさせてしまって申し訳ありません。二度と起きないようにします」と謝罪していたのでは、リスクがなくならないどころか、価値も消えてしまいます。人間の認知(ものの見方)は言葉からも作られます。「おケガをさせてしまった」と言うから「園の責任だ」という認知が育つのです。

配置不足の中で多機能化させ、子どもの育ちの専門家に本業そっちのけで保護者の課題まで扱わせようとしている責任は、国と自治体にあります。園が、職員が、負える責任はどこまでか。自治体と保護者に押し返す責任はどれか。新年度を前にした今、考えるべきでしょう。

保育と教育の中心は誰か、表明し続ける

新型コロナウイルスの流行は、基幹インフラとしての保育施設の役割を明白にしました。園が開いているから保護者は仕事に行けるのです。では、園は保護者のためにあるのでしょうか？ これ

をお読みになっただけでいるすべての方が「違う」とお答えになるでしょう。違うと私も思います。

今から数年後、おとなたちは「2020年、2021年は大変だった」と思い返すはずですが、子どもたちには365日のそれぞれが「失われた育ちの1日」であり、幼ければ幼いほど、一生に響く損失になります。本当なら、育ちを保障するために、子どもたちと未就学児施設や学校で働くおとなたち以外の全員が、最低限の活動を除いて動くのを止めるべきです。保護者の大部分もこの「全員」に含まれます。

ところが？ 子どもの育ちや心の健康はどの国でも置き去りで、子どもを支える仕事をしているおとなたちも無視されています。この国でも、おとなの都合で「いつも通り(誰にとつての?)」「思い出づくり(誰のための?)」を声高に言う保護者がいるようです。にもかかわらず、感染が起きれば、非難されるのは園。

保育・教育は誰のためにあるのでしょうか？ それを4月1日に言わずして、2021年度を始めることができるでしょうか？

*1 「保育の安全」(検索)サイト↓「安全のトピックス」↓1-10

*2 新型インフルエンザ等対策特別措置法の施行令では、保育所は「使用の制限等の要請の対象となる施設」。

*3 「保育の安全」サイト↓「コミュニケーションのトピックス」↓A-3。及びセンターのFacebookページ。